

桜の花エキス 抗糖化作用によるヒト皮膚帯黄変色防止効果について

応用企画開発課  
寺澤 周子

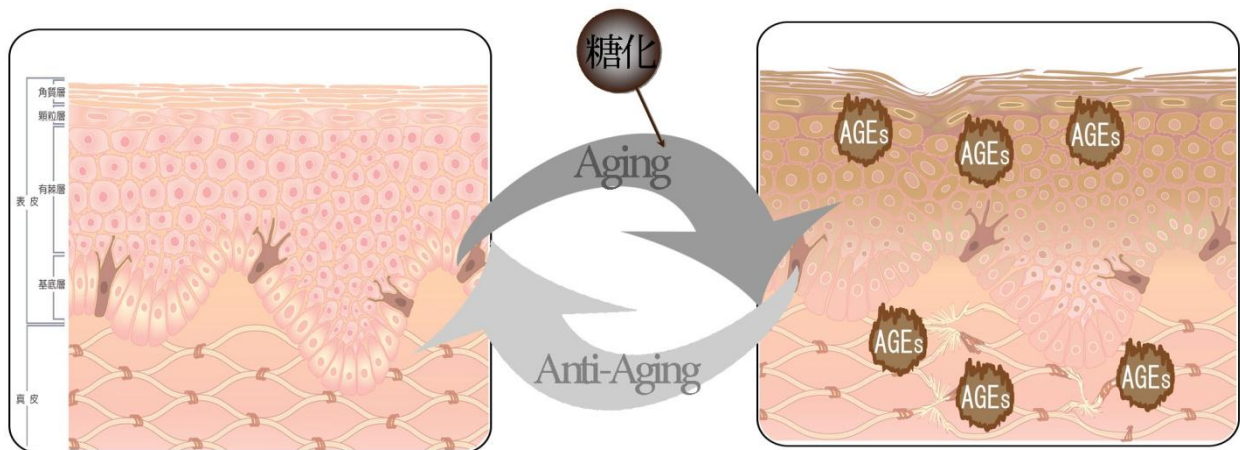
皮膚老化因子である酸化は“錆び”と表現されるのに対し、糖化は“焦げ”と表現され、加齢とともに真皮に蓄積された AGEs(※1)が皮膚の帯黄変色に関与していることが報告されています(※2)。また表皮において紫外線にさらされた部位に特に AGEs が多く存在することがわかっており、これもまた皮膚のくすみ・黄ばみに影響していることが考えられます。くすみのない肌を維持するには、メラニン対策だけでなく糖化へのアプローチが必要であると考えます。

オリザ油化では、既に桜の花エキスに AGEs 産生抑制効果などの抗糖化作用を見出しています。今回、メイラード反応によって皮膚を褐変化させる試薬(DHA(※3))を使用して、皮膚の“黄ぐすみ”モデルとし、桜の花エキスの皮膚帯黄変色防止効果を確認しました。

※1) AGEs (Advanced Glycation End Products) は、タンパク質と糖の反応(メイラード反応)により生成する最終糖化産物。

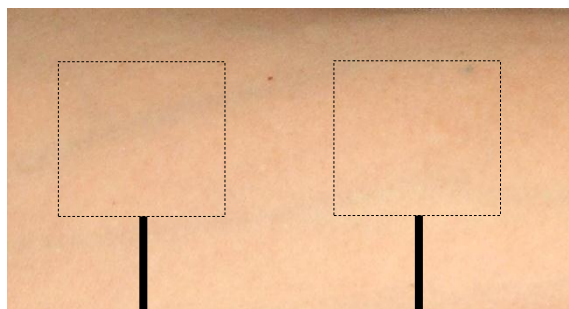
※2) Ohshima H, Oyobikawa M, Tada A, et al: Melanin and facial skin fluorescence as markers of yellowish discoloration with aging. Skin Res Technol 15: 496-502: 2009

※3) DHA(ジヒドロキシアセトン)は、角層中のケラチンタンパクの構成要素であるアミノ酸と反応し、メラノイジンという AGEs の一種を生成します。

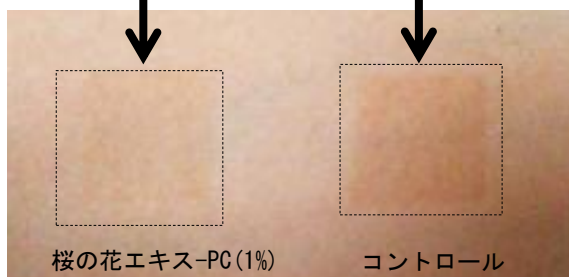


✔くすみのない肌を保つには抗糖化対策が必要。

【Before】



【After】



《実験方法》

桜の花エキス-PC 1.0 %水溶液をヒト前腕部に塗布後、3%DHA 水溶液を含浸した不織布(2×2 cm)を3時間貼付しました。

コントロールとして桜の花エキス-PC に含まれる賦形剤を溶解させた水溶液を用い、不織布剥離後3時間後の皮膚の褐変度合を比較しました。

コントロールと比較し、桜の花エキスを塗布した部位は顕著に褐変が抑えられたことから、桜のエキスは角層中の AGEs 産生を抑制し、皮膚の“黄ぐすみ”対策として有効であると考えられます。